

## 古代インド建築家たちのマンダラ

—— *maṇḍalipākāra* は「円い城壁」か？ ——

橋 本 哲 夫

はじめに

「テラガター」第 863 偈の *maṇḍalipākāra* は諸氏<sup>1)</sup> によって「円い城壁」と訳されている——

*ucce maṇḍalipākāre dāḥamaṭṭālakoṭṭhake rakkhito khaggahatthehi uttasam viharim pure*

参考訳—— かつて、わたしは、高く円い城壁をめぐられ、堅固な見張り塔や門のある城の中で、剣を手にした人々に護られながら、しかもおののいて住んでいた。(中村元訳)

また、各辞書においても、*maṇḍalin* は、PTSD. では、“*maṇḍalin*(adj.) [fr. *maṇḍala*] 1. circular Th 1, 863 (*maṇḍali-pākāra*). 2. having a disk, orb (of the sun) S i.51=VvA 116”. とあり、Childers` Dic. では、“*maṇḍali*(adj) having a disk, orb, circular. *maṇḍali* (f.) disk, circle” とあり、やはり「円い」と訳すべきようである。しかし、このガターの要旨<sup>2)</sup> ——「城の中で、物理的に安全であっても私は慄いて暮らしていた」——に対して、「円い城壁」が資するところがあるのだろうか。また、*maṇḍalipākāra* は注釈<sup>3)</sup> によれば、“*maṇḍalipākāre ti, maṇḍalākārena pākāra-parikkhite.*” とあり、*maṇḍalākārena* は、「マンダラ様式に則って」と解することができる<sup>4)</sup>。すなわち *maṇḍalin* とは、建築様式としての「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」様式のことではないのだろうか。このことを考える。その際、テキストの範囲は、*Sutta-nipāta* (Sn. と略す。以下同じ)、*Samyutta-Nikāya* (SN.) vol.1, *Dhammapada* (Dhp.), *Thera-gāthā* (Thag.), *Therī-gāthā* (Thig.), *Udāna*, *Itivuttaka*, *Jātaka*(J.) とする<sup>5)</sup>。

### 1. 建築用語としての *maṇḍala* : 「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」

Thag.863 で、*maṇḍalin* とコンパウンドを形成している *pākāra* は、古代インド建築史では、「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」という、いわば本殿、寺院境

内、村落・都市の設計図における基本要素である「周壁」を意味する。このことについては、すでに「建築家たちのマンダラ——ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」(『種智院大学研究紀要』第6号, 2005年3月)で述べたことであるが,「平安仏教学会」研究発表会(2004年12月11日, 種智院大学, 口頭発表)において付け加えたこと(pākāraが複数であること<sup>6)</sup>)もあるので, ここで改めて, 概要を記しておく。

「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」とは, 小倉泰<sup>7)</sup>著『インド世界の空間構造』(1999年, 春秋社)によれば, ヒンドゥー寺院の地鎮祭で, 「これから寺院が造営される敷地の一角に, グリッドに区切られた正方形を描き, その正方形の上で, 『ヴァーストゥ・プルシャ』と呼ばれる, 土地を支配する一種の精霊と, ブラフマー神を始めとするさまざまな神々を勧請して供養する。ここで描かれたグリッドに区切られた図形を『ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ』とよんでいる。」<sup>8)</sup>それは, いわゆる『ヴァーストゥ・シャーストラ』に記されている。

『ヴァーストゥ・シャーストラ』とは, 『シルパ・シャーストラ』とも呼ばれ<sup>9)</sup>, 『諸技芸の書』という意味で, 都市計画・建築・彫刻・絵画などを扱ったサンスクリット語の文章群を言う。最も完全なものは, 『マーナサー Mānasāra』であり, 他に, 『マヤマタ Mayamata』, 『カーシャパ Kāśyapa』等がある。・・・『マーナサー Mānasāra』はサンスクリット語で書かれているが, その内容は, P.K. アチャルヤ Acharya の英訳と図化(1934)<sup>10)</sup>によって広く知られる・・・成立年代は, 諸説あるが, アチャルヤによると6世紀から7世紀にかけて南インドでかかれたものとされる<sup>11)</sup>ものである。

そして, これらの「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」は, 同心方形状の領域に区切られ, 神々が配置される。それらのうち, 正方形を $8 \times 8 = 64$ の区画に分割する方法(マンドゥーカ)と,  $9 \times 9 = 81$ の区画に分割する方法(パラマシャーイン)の二つがよく知られており, それらを例にとると, 中心の方形は Brahṃā が占め, それを囲繞する2つめの同心方形は Rudra などの神々が配置され, さらにそれを囲繞する3つめの同心方形は神々がいないくて, 回廊のようになっており, さらにそれを囲繞する4つめの最外周の区画には Indra などの神々が配置されている(図1)。

このマンダラ(=ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ)は, 寺院の本殿建築の指標のみならず, 寺院境内の配置, しいては村落・都市(図2)の配置の指標でもあることが, 小倉泰氏によって詳細に論述されている<sup>12)</sup>。そして, その際, 寺院境

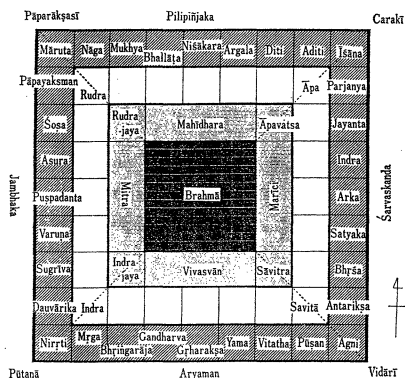


図1 ヴァーストゥ・ブルシャ・マ  
ンダラ（パラマチャーイン、 $9 \times 9$   
=81）  
『インド世界の空間構造』より

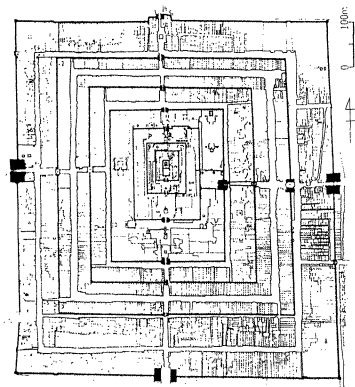


図2 シュリーランガム (タミル・ナードゥ, インド)  
『都市史図集』より

内、村落・都市が幾重もの「プラーカラ（prākāra）（パリー語「パーカラ」（pākāra））、すなわち「同心方形状の周壁」に区切られていること（ただし、村落・都市の場合は目に見えらるゝとは限らない）、さらに、村落・都市においては、職能集団の同心方形状の階層的配置が、「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」を表現していることになる<sup>13)</sup>とされる。

## 2. 経典内の「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」的要素

小倉氏の紹介する「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」の諸特徴の内、以下の4点が重要と考える。

- ①全体がグリッドに区分けされていること<sup>14)</sup>.
- ②神（本殿・境内）または人（村落・都市<sup>15)</sup>）のすみわけがある.
- ③同心方形の複数のプラーカーラ（パーカーラ、村落・都市の場合は目に見えるとは限らない）の存在.
- ④中心に特別の価値を置く<sup>16)</sup>

これらの各要素が、前述のパーリ語経典（散文を含む）および Jātaka の内に認められるかどうかを、Jātaka を中心に検証する。

- ①全体がグリッドに区別されていること—— テキストの韻文中に、 vibhatta bhāgasō-mita（整然と方形に区別されている）という語句があるが、それは、「地獄

nirayā<sup>17)</sup>」「Mithilā (都市名)<sup>18)</sup>」「後宮 antepura<sup>19)</sup>」「殿堂 kūṭāgāra<sup>20)</sup>」「草葺小屋 paṇṇasālā<sup>21)</sup>」「天宮 vyamha<sup>22)</sup>」「邸宅 nivesana や住居 nivesa<sup>23)</sup>」に対してのみ、補語として使われている。それらのうち、「地獄 nirayā」「Mithilā (都市名)」「天宮 vyamha」「邸宅 nivesana」は「村落・都市」に相当し、「後宮 antepura」「殿堂 kūṭāgāra」「草葺小屋 paṇṇasālā」「住居 nivesa」は「本殿」に相当する。これらすべては、「全体がグリッドに区分けされている」と考える。

Jātaka, VI, p.276, G. には、ある都市<sup>24)</sup>の「方形に区画された土地 (simghātakesu bhūmi)」という表現がある。

②神 (本殿・境内) または人 (村落・都市) のすみわけがある——

市内は、庶民街 (vessavithi<sup>25)</sup>)、象牙工の街 (dantakāravithi<sup>26)</sup>)、機械職人街 (pesakāravisikhā<sup>27)</sup>)、料理人街 (odanikagharavithi<sup>28)</sup>)、染物屋街 (rajakavisikhā<sup>29)</sup>) であらわされるように、職能集団によって住み分けがなされている。そして、日雇人夫 (bhataka) は、城門に住む<sup>30)</sup>。

ジャータカ第546話 (Jātaka, VI, pp. 332～333) には、ブッダによる建物と村の設計の話があり、そこには、「住み分け」「マンダラ」にかんして示唆に富む記述がある——「マホーサダ」 (=菩薩, 実はブッダ) が子供のとき、村の中央 (majjhe) にある「遊び場 kilamaṇḍala」で遊んでいたが、いろいろな危険があるので、別の場所に、「遊戯堂 kilasālā」を建てようと考え、仲間の子供たちに持ってこさせたお金で、大工の棟梁に設計 (糸を張る) させたところ、気に入らないので、マホーサダ自ら糸を張り、設計図 (vicāraṇa) を書いた。それによると「遊戯堂 kilasālā」の部屋割りは、「寄る辺なき人」「夫を失った婦人」「修行者・バラモン」「外部の人」「商人」の部屋に分けられており、すべての部屋が外側に向くようになっていた<sup>31)</sup>。この「遊戯堂 kilasālā」の設計は、「職能集団による住み分け」とは異なる基準で「住み分け」が考えられているようだ。仏教的といえる。

③同心方形の複数のプラーカーラ (pāli: パーカーラ。村落・都市の場合は目に見えるとは限らない) の存在——いくつかの都市には、「多くの城壁と門 (bahupākāratorana)」が付属している<sup>32)</sup>。ヴェーサーリーは、3重の城壁がある (J.I, p.389, 504)。しかし、いずれの場合も「同心方形」となっているかは不明。また、バーラーナシーでは、pākāra は都市の中の宮殿 (rājanivesana, antepura) にも設置される<sup>33)</sup> ので、都市自体の pākāra と併せると2重となるが、宮殿は町の中心にはない<sup>34)</sup> ので、「同心方形」となっていない。

ある村<sup>35)</sup>では、村の中心は、四辻であり、そこには pākāra で囲われ、庭園、池

のある「会堂」がある。この場合この村に *pākāra* があれば、ふたつの *pākāra* は「同心方形」となるが、この村に *pākāra* があるかどうかは不明である。

④中心に特別の価値を置く—— パーラーナシー、ミティラーの都などでは、宮殿は「都の中央 (*nagaramajihe*)」にはない<sup>36)</sup>。このことは、都の中央には王の権威を超えるものが置かれるべきだとの考えが示されている。

そして、ジャータカ第 497 話 (J.IV, pp.375 ~ 390) では、長者の娘、ディッタマンガリカーが自分の夫は *mahābrahmā* (大梵天) であると言ったところ、都市 (パーラーナシー) の人々にそのように遇され、人々は、都市の中央に (*nagaramajihe*) 大きなパビリオン (*maṇḍapa*) を建て、そこに彼女を住まわせ、出産させたということが書かれている。それは、「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」の中央のブロックに勧請される *brahmā* が意識されていることの証左と考える。

このように「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」的コンセプトは、「同心方形」状という点を除いて、テキスト内にも存在することが明らかとなった。では、それらのコンセプトとテキスト内の *maṇḍala/maṇḍalin* との関係はどうであろうか。

韻文中には以下の *maṇḍala/maṇḍalin* の用例<sup>37)</sup> がある——

*maṇḍala* (J.II, p.99, G.等), *maṇḍalin* (SN.vol.1, p.51, G.), *maṇḍalipākāra* (Thag.863), *gāmaṇḍala* (Thag.1143), *gomaṇḍala* (Sn.301; J.VI, p.27, G.), *tulamaṇḍala* (J.VI, p.235, G.), *puthavimaṇḍala* (Sn.990), *puthuvimaṇḍala* (Thag.674等), *rathamaṇḍala* (J.VI, p.515, G.), *sahassamaṇḍala* (Sn.688), *gaganamaṇḍala* (J.I, p.18, G.)

これらのうち、コンパウンドの対となっている単語は、*pākāra* (城壁), *go* (*gā*<sup>38)</sup>) (牛), *tula* (秤), *paṭhavi* (*puthavi, puthuvi*) (領国), *ratha* (車両), *sahassa*, *gagana* である。*pākāra* 以外は、寺院、都市などについての建築様式である「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」との接点はない。*maṇḍala*<sup>39)</sup>, *maṇḍalin* (SN.vol.1, p.51<sup>40)</sup>) は、前後の文脈から、建築用語とはなりえない。以上のことより、韻文中の *maṇḍala/maṇḍalin* は、「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」のマンダラではない。つまり、テキスト内には、「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」のコンセプトは十分あるが、それを表す言葉として *maṇḍala/maṇḍalin* を使わなかったということである。結果として、最初の目論見からは外れて、*maṇḍalipākāra* は「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに則った *pākāra*」とはならない。

## まとめと政治・軍事的 maṇḍala

結論として, maṇḍalipākāra は「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに則った pākāra」ではない。では, maṇḍalipākāra はどう訳すべきか。ここで, 紙幅の都合上概要のみを述べる。上記の韻文中の maṇḍala/maṇḍalin は, カウティリヤの『実利論』の「マンダラの理論」と Milindapañhā, p.350 の “tisu maṇḍalesu” という語句との総合から, maṇḍala とは, 「ひとつの強国を中心とした周辺諸国とのユニット」という「政治・軍事的 maṇḍala」として扱われるべきである。その maṇḍala はパーリ語経典韻文中の複合語の後半<sup>41)</sup> となった場合<sup>42)</sup> には, 「その種のものの集まりのうち, 中心にあるもの (最高のもの)」を意味するようになったのだと考える。一方 maṇḍalin は, 「マンダラの理論」で使われる, “ruler of a(minor)region” (the Buddhist Hybrid Sanskrit Dic.) の意である。maṇḍalipākāra は, 「領主 (地方王) の (を護る) ための城壁」となる。(以上)

1) 中村元『仏弟子の告白』(岩波文庫, 1989), 早島鏡正『原始仏典 第9巻——仏弟子の詩——』(講談社, 昭和60年), 増永靈鳳「長老偈経」(『南伝大蔵経第25巻』所収)。

2) テーラガーター 863 の要旨および, この「城 (=カピラ城と考えられる)」が円くないことについては, 拙論「建築家達の「マンダラ」——ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ——」(『種智院大学研究紀要』第6号, 平成17年, 種智院大学) 参照。また『アルタ・シャーストラ』(上村勝彦訳『カウティリヤ 実利論——古代インドの帝王学——(上)』1984 岩波文庫, 97 ページ) でいわれる「円い城砦」の「円い」は, vṛtta (pāli, vatta) であり, maṇḍalin ではない。

3) ThagA, III, p.54.

4) ākāra の語義を, CPD. の “6. way, method, manner, means,” とする。

5) 散文も含む。全て PTS 本。Jātaka の本文と注釈, 韻文と散文の区別は, 『ジャータカ全集』(中村元監修・補注, 1984~88, 春秋社) に従う。Thag.863 の dalhamattālakotthake rakkhito khaggahatthehi の部分は, ジャータカ第4巻 106 ページの韻文にも見られる——

Ukkinṇantaparikhāṃ dalhamattālakotthakāṃ / rakkhitaṃ baggaḥatthehi duppavesam idaṃ puram. (J.III, p.106, G.) 城壁と城壁の間に堀をめぐらし, 堅固な見張り塔や防護室のある, 剣を手にした人々に護られている, この内裏は, 侵入しがたい。

ここの pura は前後から「内裏 antepura」と考えられる。Thag.863 の pure も「かつて」ではなく「内裏のなかで」かも知れない。

6) Thag.863 の pākāra は英訳では複数である——K.R.Norman *Elder's verses I* (PTS.1969)

- p.82; Caroline Augusta Foley Rhys Davids *Psalm of the Early Buddhists. Part II, Psalm of the Brothers (Theragāhā)* (1913, Pali Text Society Translation Series, I) p.317. -e<-ais については, K.R.Norman *Elder's verses I*, p.146, ad G.102. および Thomas Obelies *Pāli a Grammar of the Language of the Theravāda Tipiṭaka* (2001, Walter de Gruyter) p.146-147 参照. ただし, Thag.863 は, いずれの場合も例として挙げられていない.
- 7) 上村勝彦・宮本啓一『インドの夢・インドの愛』(1974年, 春秋社) 所収, 小倉泰「聖化された空間——建築」参照.
  - 8) 小倉泰著『インド世界の空間構造』(1999年, 春秋社) 6 ページ.
  - 9) 『ヒンドゥ教の建築』(ジョージ・ミッチェル George Michell 著, 神谷武夫訳 1993年, 鹿島出版会) 96 ページ, 訳者の注記参照.
  - 10) P.K.Acharya の図化の一部が, 『都市史図集』(都市史図集編集委員会編, 1999年, 彰国社) 66 ページに記載されている.
  - 11) 『アジア都市建築史』(布野修司編 2003年 昭和堂) p.150-151. これに対し, 「根幹は, 中世初期の編集であったとしても, 近世までに増補されたところが多いのではないかと推定せざるを得ない」という意見もある. (『新訂建築学大系 4-Ⅱ 東洋建築史』昭和 51 年, 彰国社, 90 ページ).
  - 12) 小倉泰著『インド世界の空間構造』(1999年, 春秋社) 104-160 ページ. 都市とマンダラについての研究は『マドゥライ (タミル・ナードゥ, インド) の都市空間構成に関する研究』(生活空間設計学講座, 布野研究室, 大辻純子, 2004, 修士論文概要. [www.archi.kyoto-u.ac.jp/~shuron/public/mta\\_h15/ayako%20otsuji.pdf](http://www.archi.kyoto-u.ac.jp/~shuron/public/mta_h15/ayako%20otsuji.pdf) 最終アクセスタイム: 2005/08/15.) にもみられる.
  - 13) 小倉泰著『インド世界の空間構造』(1999年, 春秋社) 146 ページ.
  - 14) グリッドパターン (方格状パターン) の始原は, モエンジョ・ダロだとする米倉二郎の説がある. 「すなわちこの都市は, 東に 6 度フレタ南北線と, これと直交して大浴場の南をとる東西線を基軸に, 一辺約 600 フィート (180 メートル) の正方形ブロックによる方格状地割だったものと推定されるという.」(矢守一彦『都市図の歴史——世界編』昭和 50 年, 講談社, 297 ページ). また, 同所には, 米倉二郎の, 古代オリエントの「度制」(度量衡) とインダスのそれはまったく同一ではないけれども, 同一の原理や同様の呼称を用いている点から, 共通の起源から発しているものと想定しているとする説が紹介されている. また, 方形状町割の派生に関して, それは「方形都市圏郭の形成と密接なかわりがあったものと考える」, すなわち, シュメール期の「方形の聖域の四辺に沿い, あるいはこれより発して方形圏郭の四辺の門に通ずる主軸路が, おのずから方格状町割の基幹となってきたのであろうと思う」と言う (同書, 298 ページ). さらに, 「方格状パターン」の持つ利点として, 「最も初歩的な測量器具・技術で, レイアウトが可能」「土地の配分・所有, および租税の賦課に便利である」「軍事的・政治的支配にとって有利である」等があげられている.
  - 15) 小倉氏は, 建築書『マヤマタ』の記述に準じて「村落」と「都市」とを同列に論じている. 一方『マーナ・サーラ』も「村落」と「都市」とを同列に扱うが, それについては, 山崎元一『古代インド社会の研究』142-3 ページ参照. 本論では, 両者に区別

はつけないが、実際には、都市についての記述が中心となっている。インド都市の歴史については、『都市図の歴史——世界編』358 ページ「インド都市の〈腑分け〉の試み」に詳しい。

- 16) 同心方形によって何重にも区切られる場合、中心のブロックが最も価値の高いブロックとなる。必然的に、梵天などの最高神の「寺院」または王の「内裏」「宮殿」が位置することになる。ただし、小倉氏のコンセプトでは、都市の中心にブロックがない場合は、マンダラ様式としないようだが、この論では、都市の中心にブロックがない場合も『マーナサーウ』の分類にあるように(『マーナサーウ』の「ダングカ」, 「プラスタラ」のパターン。『都市史図集』212 ページ参照) その場合は、中央の大通りの交差点に面するブロックが最も価値の高いブロックとなる。一方、中心にもっとも弱いものを置くのは、戦術用語の「蓮華陣 padumabyūha」と呼ばれる(Jātaka, II, p.404; IV, p.343。ただし同心方形ではなく、同心の円形または近似円形)。

- 17) Jātaka V, p.266, G. ここでは、「整然と方形に区分」する基準は「四つの隅」と「四つの門」である——

Catukkaṇṇā catudvārā vibhattā bhāgasō mitā / ayopākārapariyantā ayasā patikujjitā. (地獄は、) 四つの隅と四つの門によって(基準として) 整然と方形に区分され、鉄の城壁に囲われ、鉄に覆われている。

- 18) Jātaka VI, p.46, G. Mithilā には、さらに、「多くの城壁・アーチ門 bahupākārorana」, 「堅固な見張り塔・防衛室 dāhamattālakotṭhaka」 「大通り mahāpatha」 「市場 antarāpana」 が付属している。

- 19) Jātaka VI, p.47, G. Mithilā の「後宮」. kūtāgāra と同様に単独の建造物である(J.VI, p.146)。別の箇所では、「王の子供と妃たちが住むところ」とされる。(J.VI, p.133, G.)

- 20) Jātaka VI, p.47, G. 原文には kūtāgāra とあるが、kūtāgāra に改める。A Dictionary of Pāli (2001, PTS) に kūtāgāra はあるが、kūtāgāra はない。

- 21) Jātaka VI, p.276, G.

- 22) Jātaka VI, p.120, G., p.122, G. この宮殿は、「大地の区分 (bhūmibhāga)」を有している。宮殿の大きさを表すものか？

- 23) Sn.300. nivesana とは「敷地」、nivesa とは、その中の「建物」(comm.ad Sn.300)。J.IV, p.276 の nivesana と nivesa も含めてよい。

- 24) 都市名不詳。その都市には「多くの壁と門 (bahupākārorana)」も付属している。

- 25) J.VI, p.485, G. J. VI, p.485, 散文, ジェートウッタラの都。

- 26) J.I, p.320II, p.197, バーラーナシー。

- 27) Udāna, p.4, ラージャガハ。

- 28) J.III, p.48, サーヴァッティ。

- 29) J.IV, p.81, アシタンジャナ。

- 30) J.III, p.446, バーラーナシー。原文は、bhatika とあるが、p.447 の bhataka および PTSD. によって、bhataka に改める。階層に応じた住み分けの 1 例である。

- 31) 「すべて外側に向くように」作った場合、建物がほぼ円形となる可能性がある。もし、そうであり、さらにもし、maṇḍala が「円い」を意味するなら、この「遊戯堂

kilasālā] にこそ maṇḍala をつけて呼ぶべきである。あるいは、「ヴァーストゥ・ブルシャ・マンダラ」を描いたのだとしても、それは、方形であるので、円いという意味での maṇḍala は付加しないのは当然であるが、今度は、「ヴァーストゥ・ブルシャ・マンダラ」としての maṇḍala をつけて呼んでもおかしくないのに、そうはならない。村には、この「遊戯堂 kilasālā」とは別に元からあった「遊び場 kilamaṇḍala」もあり、両方の村中での位置をマホーサダ (実はブッダ) は設計している。sālā と maṇḍala との違いは建物の形態の相違以外にあると推測される。それは、建物の位置ではないかと考える。すなわち、同一の機能を持つもののうち、中央にあるものには maṇḍala をつけ、そうでないものにはつけない、ということである。あるいは、maṇḍapa の誤記の可能性も考えられる。

- 32) ジェートウッタラ (J. VI, p.592, G.), ミティラー (J.VI, p.46, G.), 都市名不詳 (J.VI, p.276, G.).
- 33) J.III, p.505. ここでは, rājanivesana と antepura (antopura の v.l.) がほぼ同じものと扱われているが, rājanivesana のなかに antepura が入れ子状にあることも考えられる。その場合は pākāra が 3 重になる。
- 34) バーラーナシー, ミティラーなどの都市に「布施堂」を設置する場合, 「都の四つの門 nagaradvāra」, 「都の中心 nagaramajjha」, 「宮殿の門前 nivesanadvāra」におかれる (J.I, p.262, IV, p.355 等) ことから, 「宮殿」が「都の中心」でないことがわかる。
- 35) マガダ国のマチャラ村。 (J.I, p.199)
- 36) 注 37 参照。
- 37) これらのうち, maṇḍalin (SN.vol.1, p.51), maṇḍalipākāra (Thag.863), puthavimaṇḍala (Sn.990), puthuvimaṇḍala (Thag.674) については, 『頼富本宏博士還暦記念論文集 マンダラの諸相と文化』(平成 17 年 10 月出版予定, 法蔵館) 所収「パーリ語経典韻文中の maṇḍala について (I)」で論じた。
- 38) ノーマンは, gāma-aṇḍala としつつ, “around the world” と訳す。K.R.Norman Elder's *verses I* (PTS.1969) p.105, 281. 筆者 (橋本) は, 仮に gāmaṇḍala=gomaṇḍala とし, 語義を「牛王」とするが, さらに調査が必要であろう。
- 39) Sace va t'ānujo poso sikhārākarakappito / ānane taṃ gahetvāna maṇḍale parivattaye / khippam eva pahatvāna tass'eva anuvīdhiyatīti. // (J.II, p.99) もしも美しく, 姿のよい人が, 手綱をひいて, 円形牧場を一まわりすれば, 速やかに, 足を引きずるのをやめて, 彼のまねをするでしょう (田辺和子訳『ジャータカ全集 2』349 ページ)。筆者 (橋本) は, maṇḍale を注釈と同じく assamaṇḍale と読み, さらに pl.Ins と解し, 「円形牧場を」にかわって「最高の馬とともに」という訳もあるのではないかと考えている。
- 40) 前述「パーリ語経典韻文中の maṇḍala について (I)」参照。
- 41) 複合語の型によっては, この訳とはならない。
- 42) 時間的先後を言っているのではない。

〈キーワード〉 maṇḍala, vāstu-puruṣa-maṇḍala, prākāra, 建築

(種智院大学助教授)

ning of the study of the two works, we have to define Myōe's basic position on criticism of *Senchakushū*. As one of the approaches, we will consider *Zaijarin* and *Shōgonki* comprehensively by focusing attention on the various texts from which Myōe quoted for his criticism of *Senchakushū* and examine his purpose in quoting them.

The aim of this paper is make clear his criticism common to the two works through the analysis of their structures, and then to compare and examine the texts quoted for it.

## 56. Maṇḍala of Architects in Ancient India

Tetsuo HASHIMOTO

Can we translate *maṇḍalipākāra* in *Theragāthā* 863 with “a circular rampart”?

In the *Jātaka* there are many concepts of *vāstu-puruṣa-maṇḍala* which is a plan for a temple or a city, but this is not expressed with the word *maṇḍala/maṇḍalin*. The meaning of *maṇḍala/maṇḍalin* in verses of the Pāli canon can be figured through synthesis with “a theory of *maṇḍala*” in the *Arthaśāstra* of Kauṭilya and “*tīsu maṇḍalesu*” of the *Milindapañhā*.

It means “a unit with peripheral countries led by one great power in the center” and should be treated as the *maṇḍala* of politics/military affairs.

The *maṇḍala* comes to mean “the whole unit with order relation in the center and the outskirts” in primitive Buddhism. And when it is located in the latter half of a compound, it means “a thing in the center (or the best thing) among the aggregation of the kind”.

On the other hand, *maṇḍalin* means “ruler of a (minor) region” used in “a theory of *maṇḍala*” as explained in the *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*.

*Maṇḍalipākāra* should be translated with “the rampart for (or to protect) a lord or a king of a (minor) region”.